

### 13. 居住空間のデザイン

#### 13.1 学生住居の計画

筑波大学では、学生の約50%がキャンパス内の学生住居（宿舎）に住居しており、そのほとんどが1～2年生である。これは全国から学生が集るこの大学の性格と、周辺地域の都市化が遅れたことによって、異常に高い学内居住率となったのである。

大学はその歴史の初期には、学生の住居や居住施設そのものであったわけであるし、現代でも学生居住施設を大学の中心に据えた、カリフォルニア大学のサンタクルツ校のような例も珍しくない。学生が自らの大学に住むということ自体は大学のプロト・タイプのひとつであり、理念としては十分な根拠と利点をもっている。しかし、生活のトータリティを直接空間のそれに結びつけるこの方法は、大学に限らず空間の利用者と管理者が分裂している現代では多くの困難がともない、惨めな失敗に終る場合が多い。また、学生の大半がキャンパスに住むことになると、通学を主体とした多くの大学とは異なる現象が起る。すなわち、サークル活動や交友関係など学内での生活が活気を呈する反面、外界と隔絶され学習とその他の生活の区切りが不明確になり、緊張感に欠けた生活になりがちである。

これらの点を考慮して、学生住居計画の原則として次の3点を取り上げた。第1は個室の原則、第2はグルーピング（個室群）のレベルにおける多様な住居タイプの用意、第3はコミュニティの構成である。

単身住居はひとり20㎡で、個室が9～10、ラウンジ1～3、ユーティリティ2、通路3～6、生活センターに2㎡と配分される。グルーピングの鍵がラウンジで、ラウンジと個室の接続関係によって、基本的なふたつのタイプがある。直接少数の個室がついたAタイプと、廊下で結ばれるDタイプで、後者は伝統的なドミトリー型であるのに対し、前者は小集団の親密な関係によって成り立つ新しい型で、学生にはこちらが圧倒的に好まれている。コミュニティは、生活センターを中心とした1,200～1,500人の3つに分けられ、それぞれ土地の従来の字名をとって、平砂、追越、一の矢という個有名詞をもっている。これは、4,000人を越す大規模な学生集団を一体として計画するのはヒューマン・スケールを越すと考えられたからである。

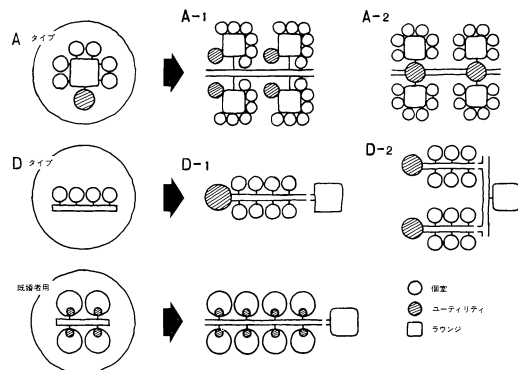


Fig. 13.1.1 学生住居の群構成ダイアグラム

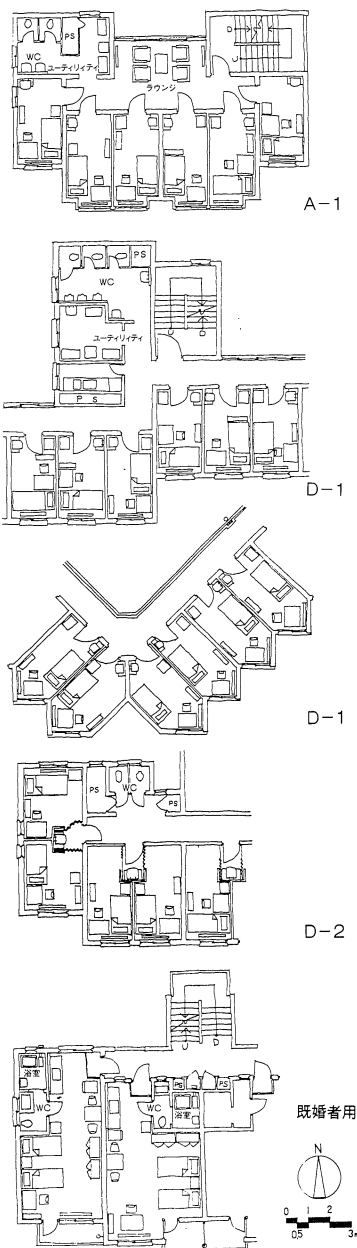
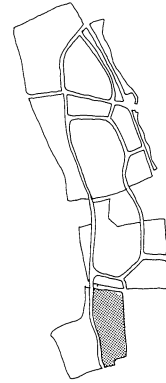


Fig. 13.1.2 学生住居のグルーピング・タイプ



設計 土肥博至  
三村翰弘  
岡野真  
田中孝典

### 13.2 平砂・追越地区

平砂学生宿舎地区は、キャンパスで最初に計画され、建設された地区で、全部で約1,300戸(全部単身用個室)である。配置図(Fig. 13.2.2)から明らかなように、西半分の大学のメインペデに沿った部分と、東半分とは、計画上の位置づけもデザイン上の扱い方も異っている。西側は、いわば通りの空間の形成を意図したもので、すべての住棟が直接ペデに接し、しかもペデ空間をつくり出す要素となっているのに対し、東側は異形の建物が2棟ずつペアとなって、サブ・グループを形成し、いわば小世界をつくり出している。空間密度も前者は高く、後者は低い。

この手法は、平砂地区に続いてその南に建設された追越地区でも引き継がれており、やはり西側のペデ沿いの部分は通り空間型でサブ・グループはないのに対し、東側はこれも異型の住棟が3棟ずつで小世界をつくる構成になっている。このペデ沿いのアーバンティを目的としたデザインは両地区に共通する特色であり、東側の、手法としては常識的な郊外住宅地型のものと好対象をなしている。追越地区(Fig. 13.2.4)は、学生住居約1,200戸(全部単身用個室)のほかに、附属病院の看護婦住居が約400戸あり、地区計画上はこれも一体に計画されている。

アーバンティ型の地区の空間構成においては、建築としての住棟のデザインとそれを主たるエレメントとする地区デザインとは同じのものであって、建築の設計がそのまま地区空間の構造となり、位置が定まれば住棟のタイプも決定される、という不可分の関係にある。このアプローチはかなりの冒険であったが、結果としてきわめてユニークな形態をもつ建築を出現させた。同時に、建築による空間構成の堅さを緩和するために、平砂(下図)、追越それぞれに、緑を中心とする広場がデザインされている。両地区で使用された住棟のタイプは、基本的には p. 167 に示した 6 タイプであり、タイプ 4 は両方で最も多く使われている。

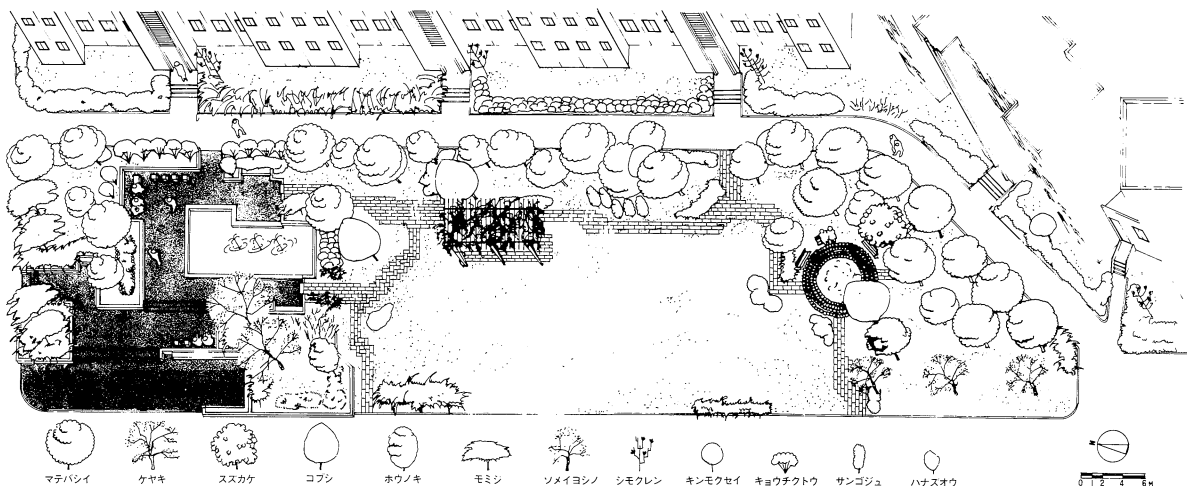


Fig. 13.2.1 平砂地区中庭広場

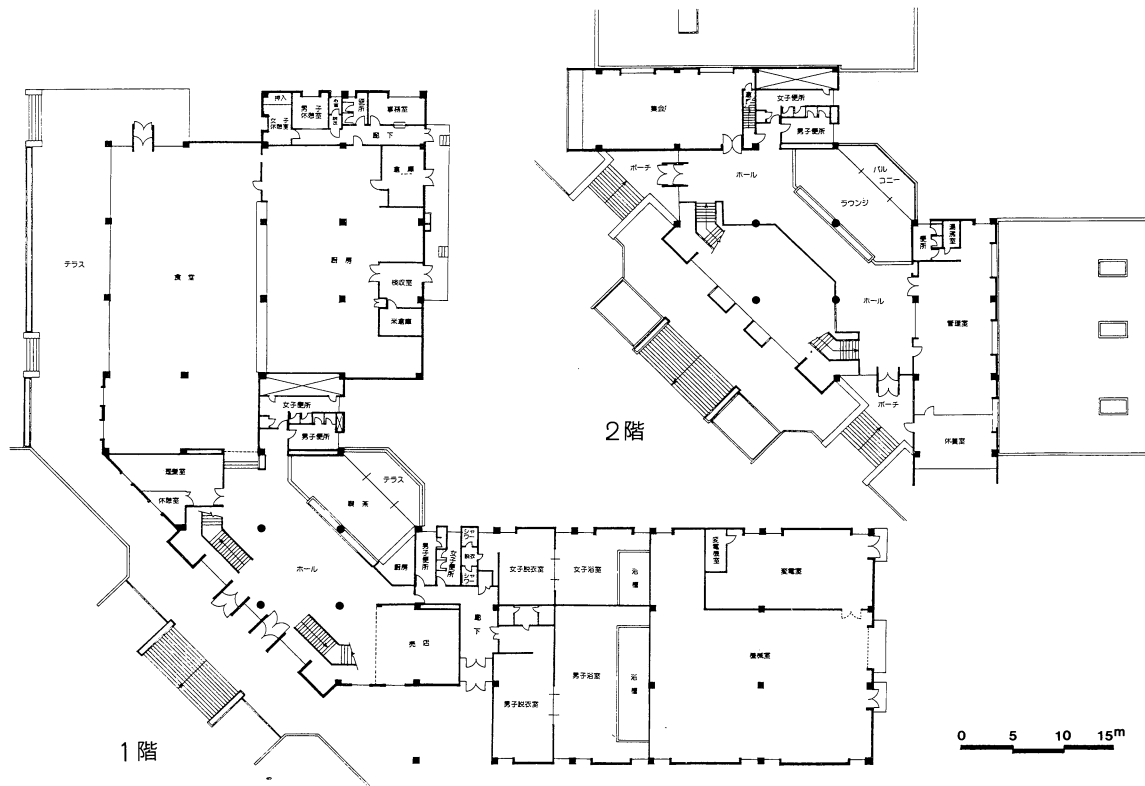


Fig. 13.2.3 平砂生活センター平面図

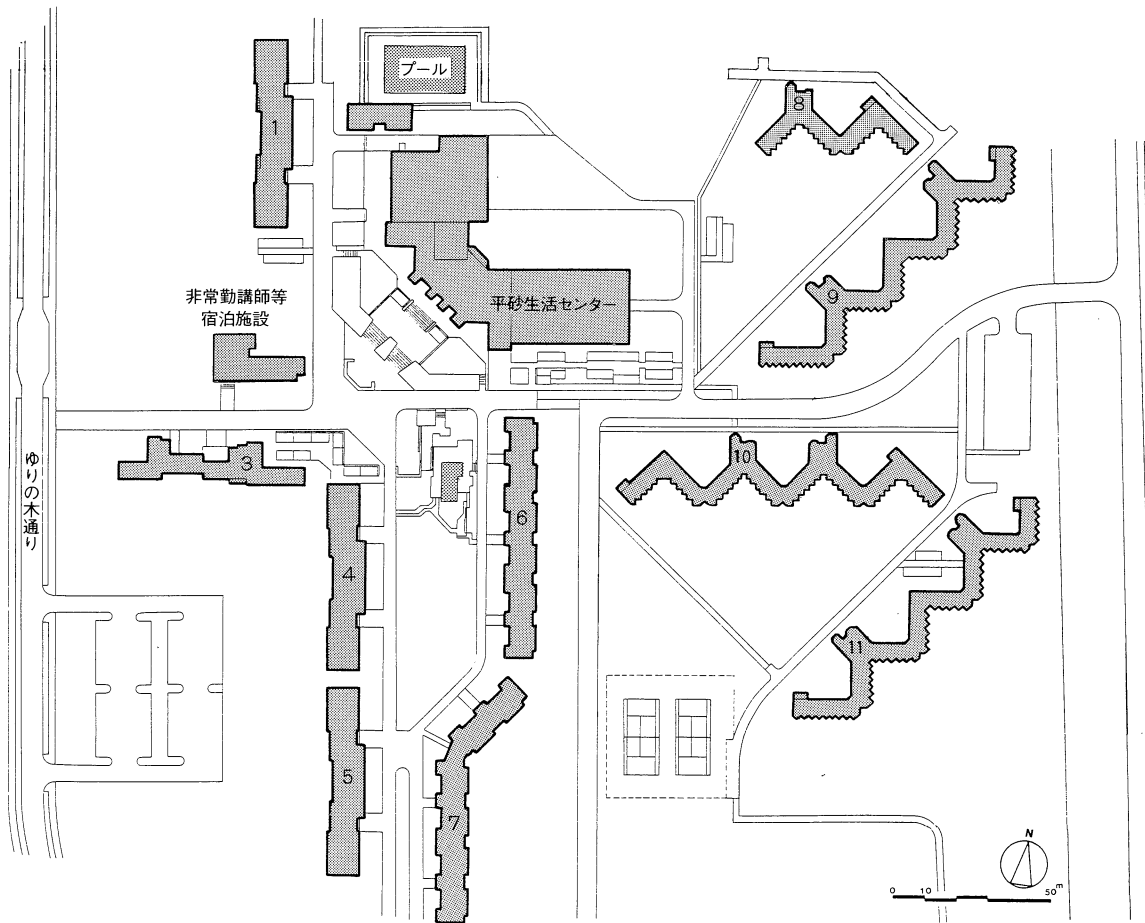


Fig. 13.2.2 平砂地区配置図

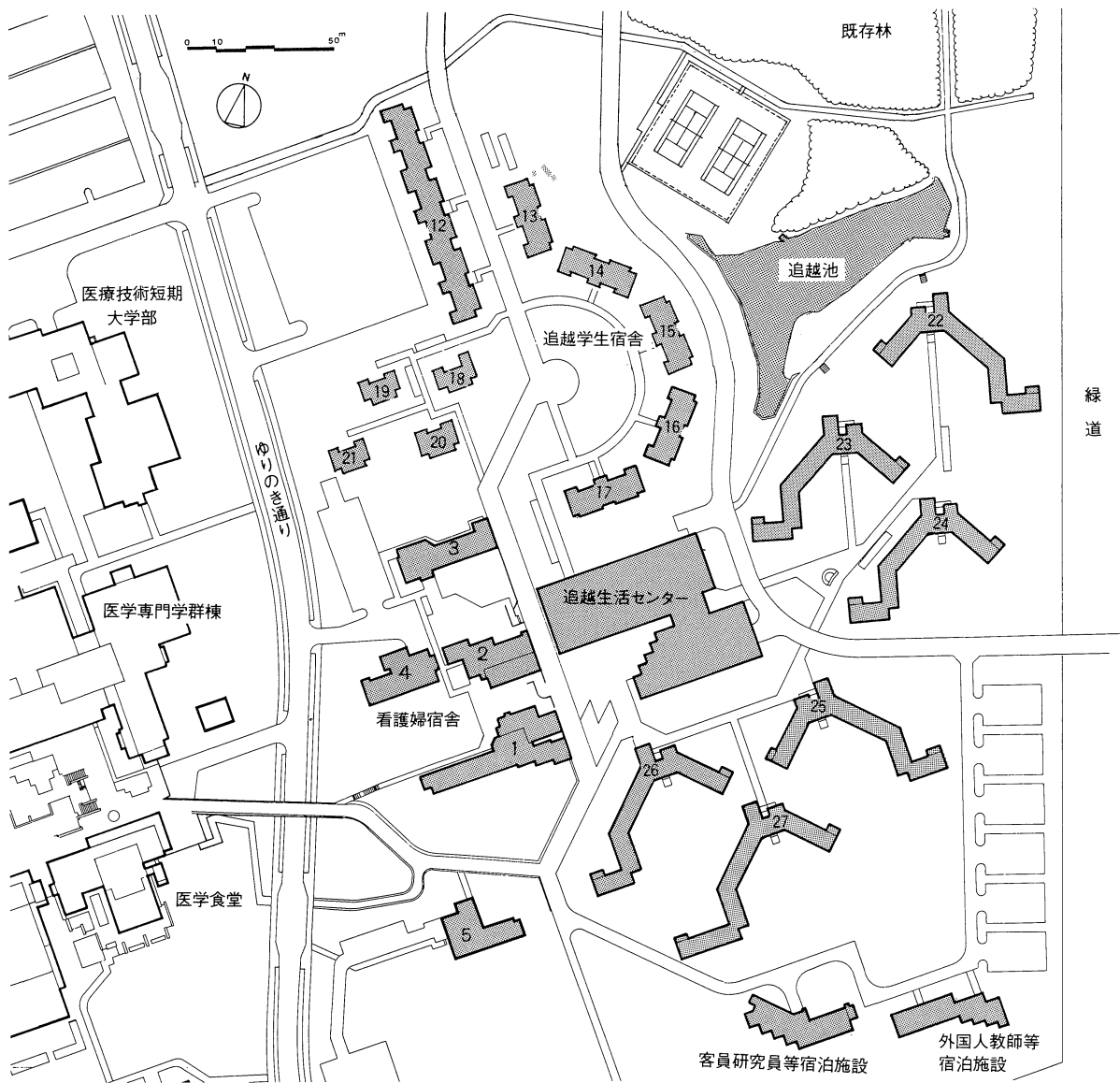


Fig. 13.2.4 追越地区配置図

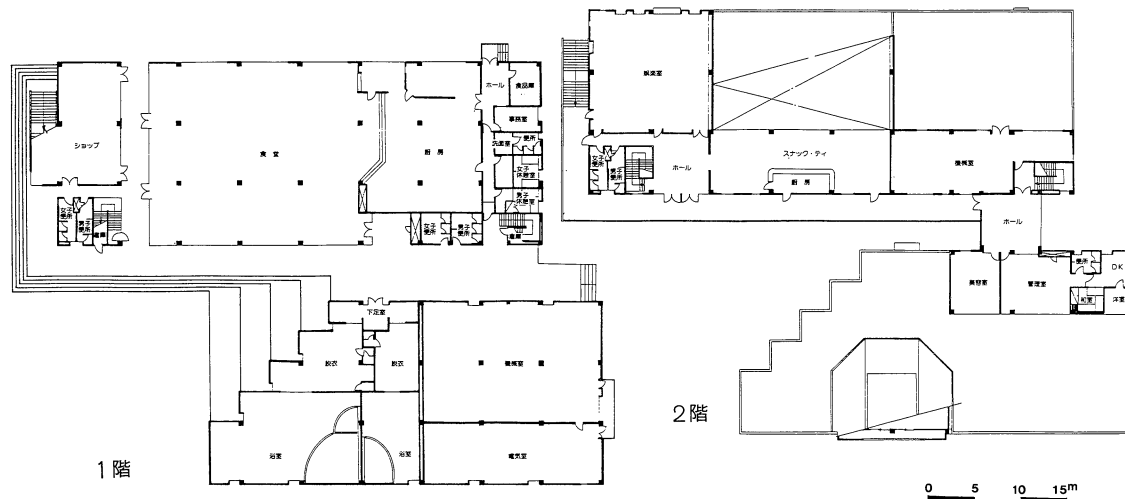


Fig. 13.2.5 追越生活センター平面図

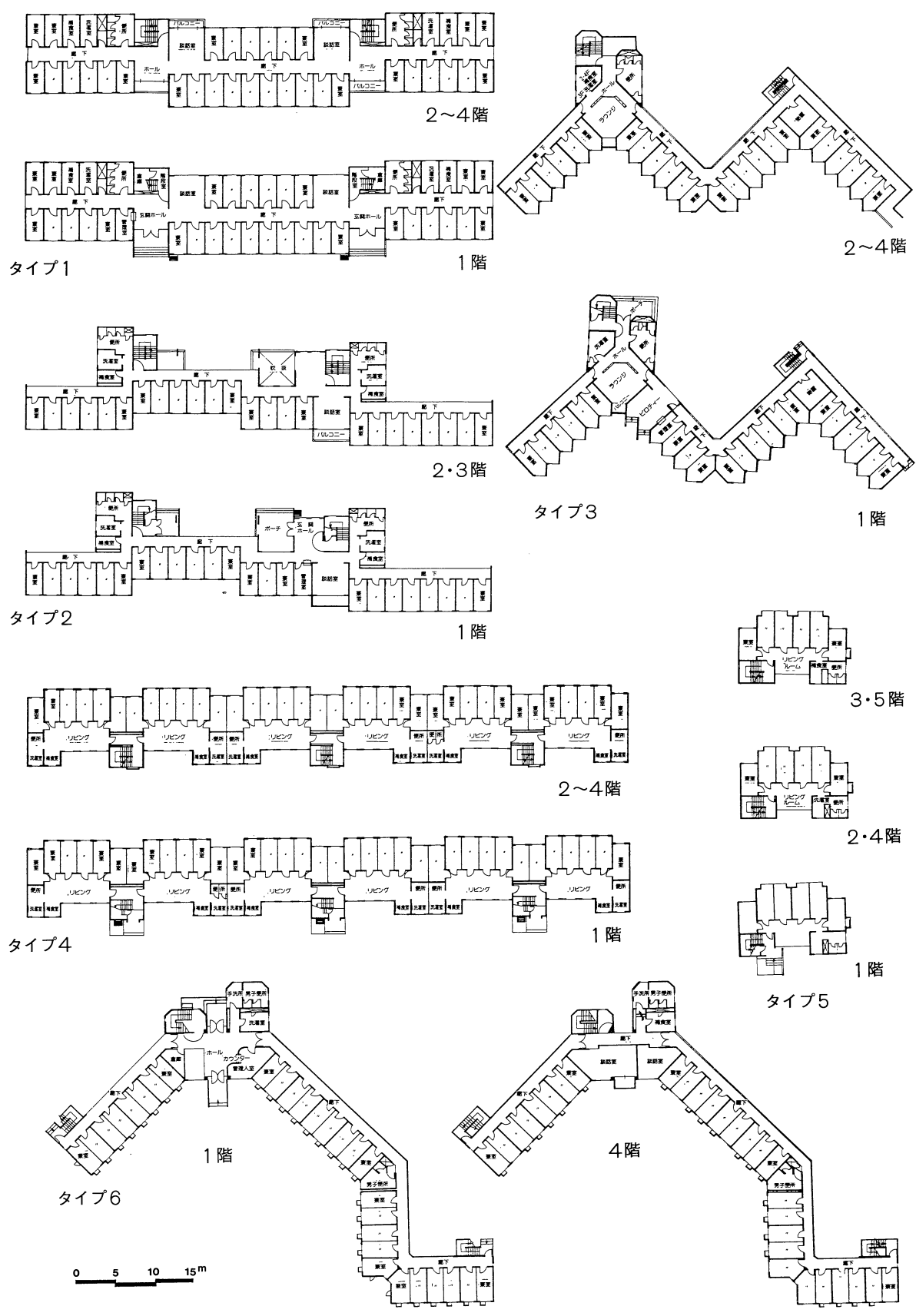
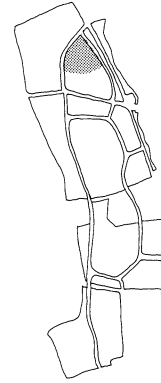


Fig. 13.2.6 平砂・追越地区住棟設計図



設計 土肥 博至  
畑 龍徳  
吉武良子

### 13.3 一の矢地区

一の矢学生住宅地区は、建築の順序からは平砂、追越の両地区の後から、第3の住宅地区コミュニティとして計画、建設された。地区の基本的性格を定める条件として、まずその位置があげられる。他の2地区がキャンパスの南端部に位置して都市の中心部に近く、また周辺地域も市街地であるため、相互関係を考えた開放的な計画条件をそなえているのに対して、一の矢地区は逆にキャンパスの北端部に位置する。ここは、キャンパスのもっとも奥まった一角であるだけでなく、周辺地域は農村部であって、居住空間としてはやや孤立している。もうひとつの条件は、この住宅地が单身学生のための住宅だけでなく、既婚学生のための小世帯用住宅との混合地区だという点である。学生といえども既婚者の生活における住宅の重要性は单身者のそれとは独自のものであり、この両者の調和をはかることが大切である。最終的には、单身用850戸、既婚者用400戸（人口にして800人）から成るが、当分の間は大学院生が少なく、既婚者率もそう高くないため、すべての既婚者用住宅は、单身者の2人居住用の住宅として転用可能な設計をすることも計画条件のひとつであった。さらに、この地区の予定地には、キャンパスでも残り少なくなったアカマツ林が多量に残存しており、これを保存することが大きな目標としてとり上げられた。

これらの諸条件は、いずれも一の矢地区のデザインを進める上での大きな拠り所となったが、それにも増して決定的な判断の拠り所となったのは、先行2地区との空間構成上の強い対比意識である。それは、南の2地区がメイン・ペデを中心としたストリート空間の形成を強く意図した、アーバニティ型のデザインを行っているのに対して、一の矢ではむしろ、公共性を有するメイン・ペデと私空間としての各居室との直接的な接触を避けて、よりローカルな空間の形成を目的としたデザインを行っている点に現われている。そのために、地区をさらにいくつかのサブ・グループに分け、グループ毎の特色を持たせようとするこのアプローチは、コミュニティ型とも呼ぶべき構成原理である。したがって、地区のデザインと住棟のデザインとの関係もまた南地区でのそれとは異なり、グループ毎にひとつのタイプが対応する方法で、全体で4種のタイプが使用されている。そのうち2種は中層および高層の既婚者用住宅であり、单身用の2つのタイプのうちひとつは南地区で用いられたもの（タイプ4）の改良型で、残るひとつの新タイプはAとDの中間型である。

一の矢地区のデザイン・プリンシプルは「包み込む」ことである。これはいろいろなスケールと多様なエレメントの使い方のレベルにおいて追求された。大きくは保存アカマツ林と長大な兵太郎池という自然の要素によってこの地区全体を包み込んでおり、ついで中央部の小規模な住棟群を東側の長いウォール状の棟と西側の3本の高層棟で包み、また地区の最南端を押える生活センターも、地区を包むように南側に翼を張り出している。そして南の方から、キャンパスを4kmにわたって縦断しているメイン・ペデも、この地区の北端部で3本のポイント棟に柔かく包まれてその役割を終ることになっている。一の矢地区では、厳密にコントロールされた色彩デザインやストリート・ファニチュアやペーヴメントのデザイン、さらに地区を外部的に向って印象づける池際の高層棟のデザインによって、明瞭なアイデンティティの創出が意図されている。

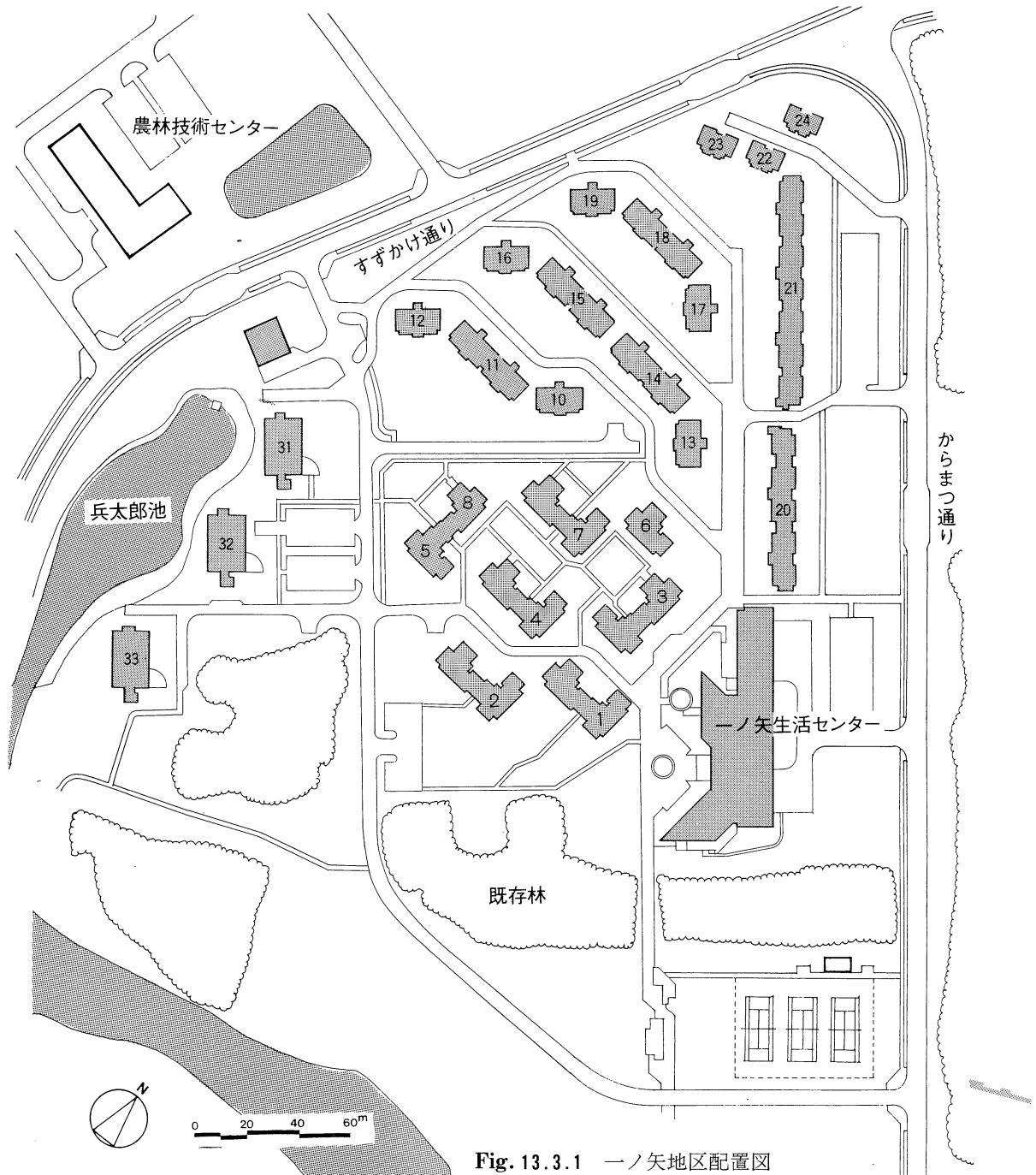
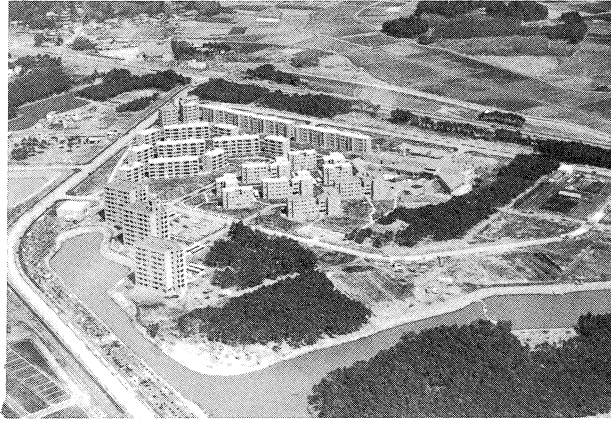


Fig. 13.3.1 一ノ矢地区配置図

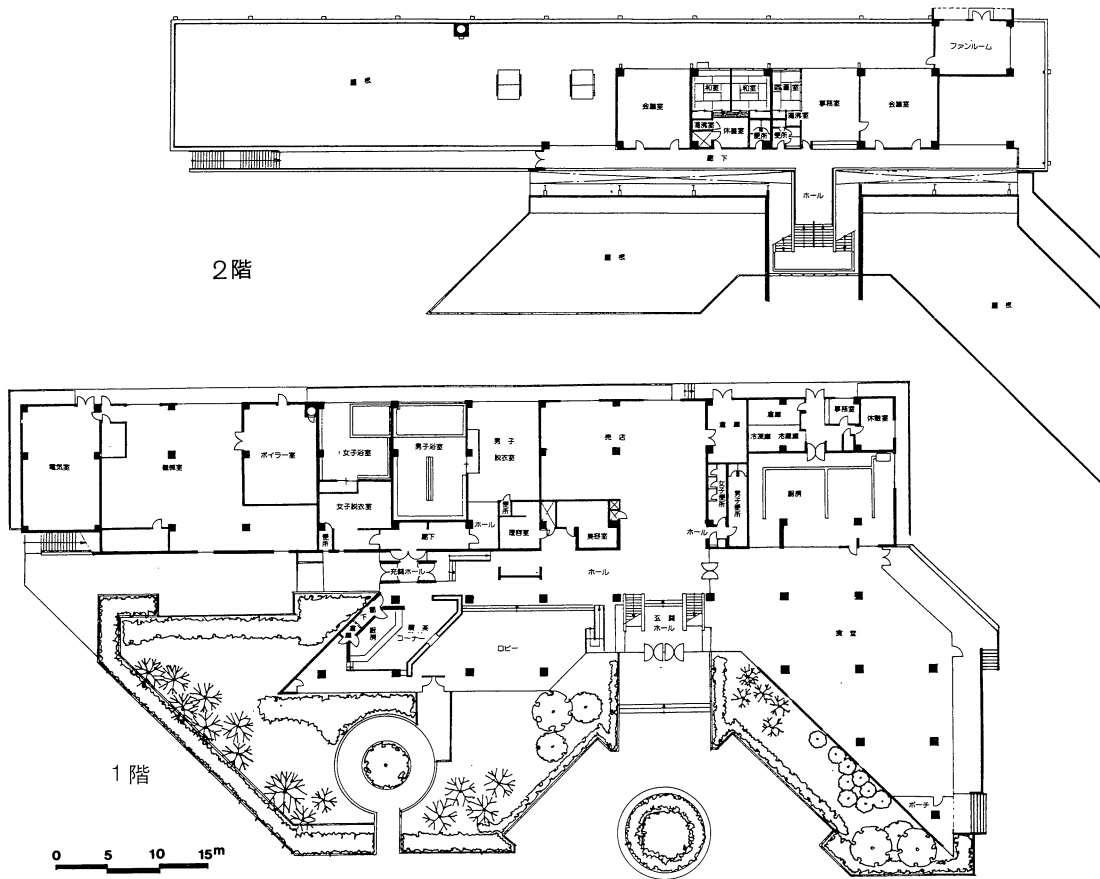


Fig. 13.3.2 一ノ矢生活センター平面図

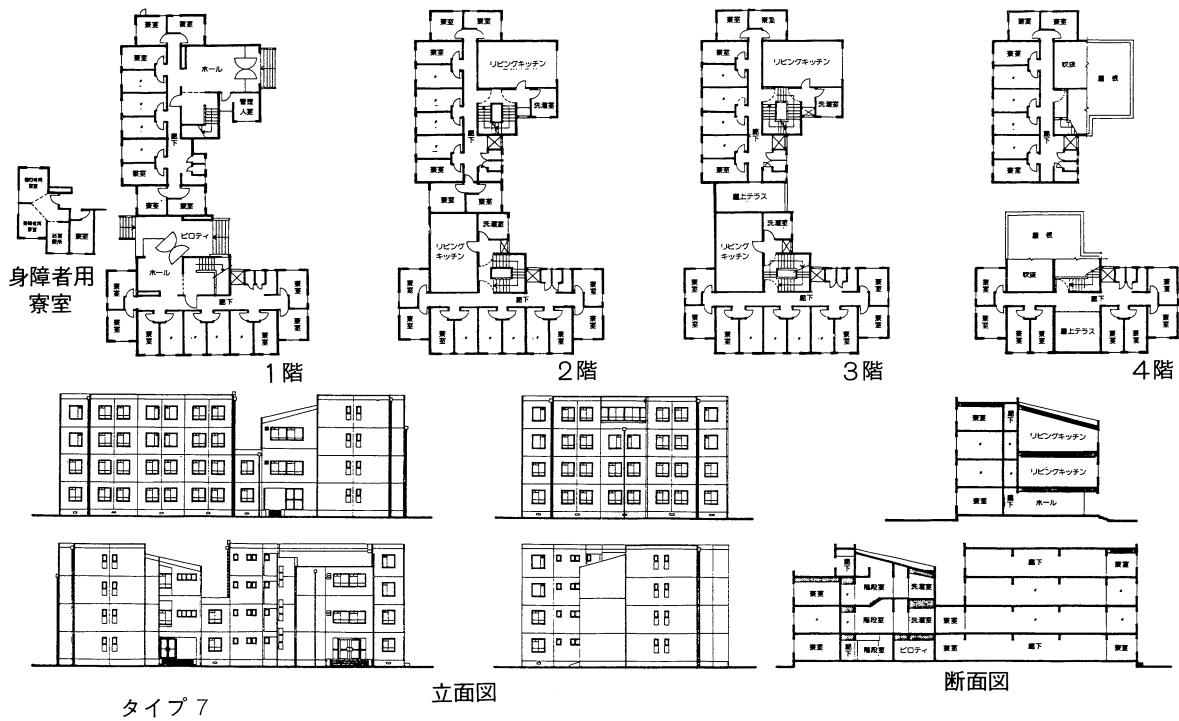


Fig. 13.3.3 一ノ矢地区住棟設計図1



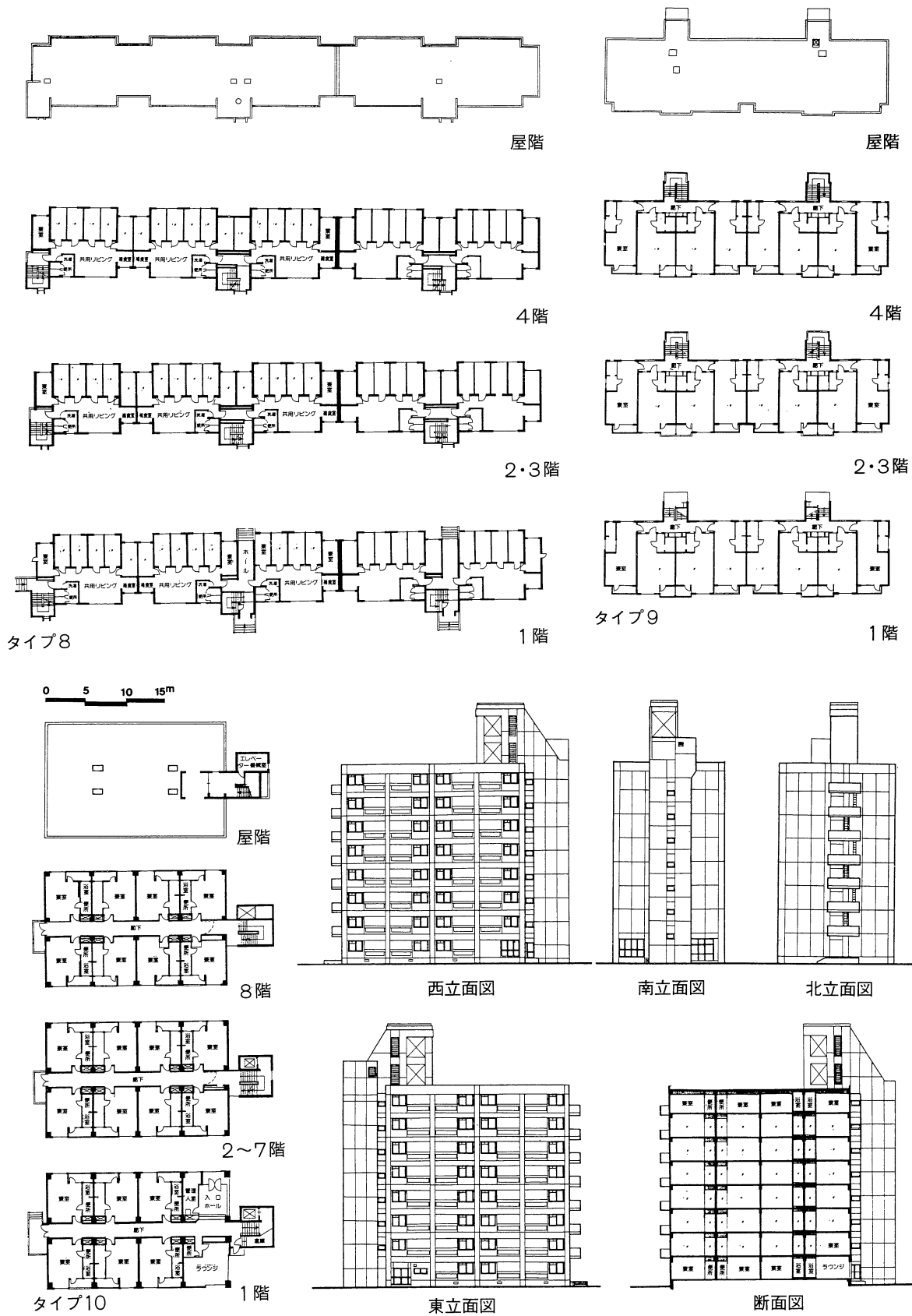


Fig. 13.3.3 一ノ矢地区住棟設計図 2